

【研究ノート】

民族衣装におけるミラーワークを用いた服飾造形研究

A Study of Mirror Work Techniques Used in Folk Costumes for Their
Application to Garment Making

井出 千尋
IDE, Chihiro

1. はじめに

今日、私たちは様々な装飾技法を目にすることができ、それらにより現代の服飾造形は豊かなものになってきている。本稿では、刺繍技法のなかのミラーワーク（ミラー刺繍）を研究対象とする。

ミラーワークは、小さな鏡を布の上に置き、それらを糸でかがって布に留め付けるもので、その鏡の周りをさらに刺繍で埋めることにより独自の文様を描き出す装飾技法を指す。

こうしたミラーワークは、主にインド北西部、パキスタン、アフガニスタンなどの砂漠地帯に住む、ヒンドゥー教徒・イスラム教徒の遊牧民族に伝承されている装飾技法であり、民族や宗教により異なる特徴がある。

さらに現代のミラーワークは、民族衣装に留まらず、日常着としてのエスニックファッション、さらにデザイナーによるコレクションにおいても使用されるようになり、幅広い用いられ方が見られるようになってきている。

しかしながら民族衣装におけるミラーワークは、未だその制作に膨大な時間と手間と技術を必要とし、装飾技法としては、効率的ではないため、現代の服飾造形に用いるには、材料や道具、技法などを工夫していく必要がある。同様にデザイナーによるコレクションの作品におけるミラーワークも手間がかかり、材料などが特注品であるなど一般的ではないものも多い。

本研究ではミラーワークの歴史、制作方法を研究する。それを踏まえて、新たに一般の人々に向けた現代の服飾造形に役立つ、効率的でありながら効果的に装飾性を高めるミラーワークの制作方法を研究することを目的とする。

2. 民族衣装におけるミラーワーク

2-1. ミラーワークの歴史

ミラーワークの詳しい起源は、記録が殆ど残っておらず、明らかになってはいない。王族など特権階級の人々が高価な宝石、金糸、銀糸などを用いて装飾された衣装を身に着けていたことに憧れた庶民が、地域で採れる雲母の欠片を糸で布に縫い付けて真似たのがミラーワークの始まりであったとされる。

材料の「ミラー」は、時代とともに変遷があった。初期の、ミラーワークに用いられたケイ酸塩鉱物の雲母は、光を受けると反射して輝くため、宝石に代わるものとして代用された。しかし、層になっている雲母は硬度も低く、脆くて剥がれやすいため、耐久性には乏しかった。その後ムガル帝国時代（1526年～1857年）には、ガラスを大量に作る技術が発達してきたため、耐久性に乏しい雲母の代わりに、ガラスと錫で作られたミラー片が使用されるようになった。

現存するミラーワークや、それらが掲載されている資料を見ると、その殆どがガラスミラー片を使用している比較的新しいものであった。その理由としては、衣服や布は使用により激しく劣化し、また使用した布は別の布と剥ぎ合わせて使い回すため、資料として残っていないと考える。また、一般庶民の衣服が博物館等に収蔵されるようになったのは近年のことで、その衣服も19世紀後半から20世紀にかけて作られたものが殆どであり、雲母が縫いつけられているような古い時代の衣装は、現存する衣服や書籍等の資料でも見ることができない。

2-2. ミラーワークの役割

民族衣装に用いられる刺繍などの装飾には、自分の身を飾るだけではなく、それらを身につけることの意味が存在する。

ミラーワークにも、役割があり、大きく分けると以下の3つが重要とされている。

① 所属する集団・社会的身分を表す役割

特色ある刺繍が施された民族衣装を身につけることは、生活様式や宗教も異なる部族が生活している土地の人々にとって、その人物を表す目印となる。特に女性の衣服では、未婚、既婚、妊娠中、寡婦、老年の社会的身分で衣服に施される刺繍の量に違いが見られる。

② 魔除けのお守りとしての役割

ミラーは光を受けて反射する様子から、悪しきものを反射し、寄せ付けないものと考えられていた。そのため、妬みや嫉妬などから身を守る邪視¹⁾除け・魔除けなどのお守りとして、子供や女性の衣服などに好んで付けられるようになり、ミラーワークが発展するきっかけとされた(図1)。



図1 命名儀礼時にミラーが付いた帽子を被せられる幼児
カッチ地方 (1998年)

③ 婚礼の際の持参財としての役割

ミラーワークが行われる地域では家に女の子が生まれると、5~6歳ごろから針を持たせて刺繍を教えた。彼女たちは結婚をするまでに、花嫁衣装(図2)をはじめとする晴れ着や被り物、袋もの、壁飾りやトランと呼ばれるのれん(扉飾り)などの調度品を制作し、ミラーワークを施していった。これらは婚礼の際、花嫁側の持参財(図3)としての役割も担っていた。



図2 花嫁衣装
カッチ地方 (1998年)



図3 持参財
カッチ地方 (1990年)

2-3. ミラーワークの技法

2-3-1. 民族衣装に見られるミラーワークの技法

前述したように、ミラーワークが行われる地域では、刺繍技術を持つことは女性にとって必要不可欠とされ、母親から娘へと幼い頃からその技術が脈々と受け継がれている。こうした民族衣装に用いられるミラーワークの技法について、制作方法の調査を行った。

基本的なミラーワークの技法

形を整えたミラーを布の上に置き、糸でミラーを留め付け、その糸をすくいながら、ボタンホール・ステッチで留め付けていく方法(図4)が一般的で、部族間での差異は殆どない。ミラーは、丸型のミラーが多く部の族で用いられているが、三角、四角、菱形、涙型などの多角形のミラーを使用する部族もいる。現存している衣服では、多角形のミラーが抜け落ちてしまったものが多い。

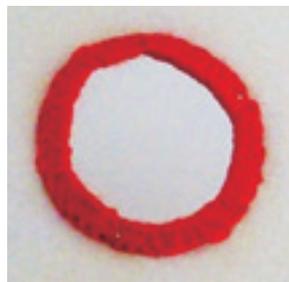


図4 ボタンホール・ステッチでとめたミラー

ミラーを留め付けた後、その間を埋め尽くすようにオープンチェーン・ステッチ(図5)や、ダブルチェーン・ステッチ、ヘリンボーン・ステッチや、カッチ地

方で独自に発達したインターレーシング・ステッチ（図6）等を用いて、それぞれの民族に伝わる文様を表現している。



図5 オープンチェーン・ステッチ



図6 インターレーシング・ステッチ

基本的なミラーワークの技法は、どの地域、部族でもあまり差は無いが、用いるミラーの形状や刺繍の文様は、社会的身分や信仰する宗教により大きく異なる。特に宗教は、着用する衣服の形態や刺繍に大きな影響をもたらし、部族ごとに特色ある民族衣装として発展していった。

糸の使い方については、どのミラーワークも、布の表に出ている糸の分量に対し、裏面の糸の分量が極めて少ないという共通点を持っている。ミラーを留め付けるボタンホール・ステッチや、間を埋めるオープンチェーン・ステッチ、カッチ地方で発達したインターレーシング・ステッチも、すべて布の表面に糸が多く渡り（図7）、裏側はごく僅かに糸が渡るのみである（図8）。

砂漠での遊牧生活では、糸も布と同様に貴重なものであり、簡単に手に入るものではなかったため、限られた材料を無駄なく利用し、最大限の装飾ができるよう、工夫を凝らしている様子が見られる。

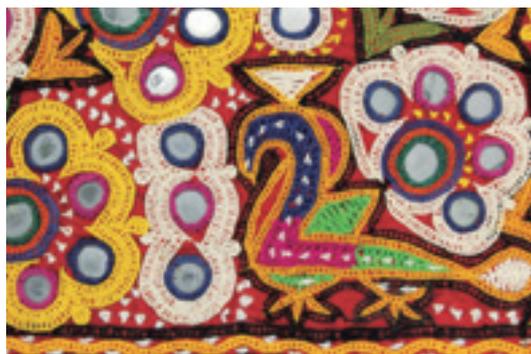


図7 刺繍（表）



図8 刺繍（裏）

刺繍の文様について

多神教で偶像にも神が宿るとされるヒンドゥー教の部族の刺繍では、神々の姿や、寺院、人々の生活の情景、縁起が良い吉祥文、動物や植物のモチーフなどが図案として使用される（図9）。その一方で、インド北西部のラジャスターン州、グジャラート州などのイスラム世界に隣接した土地に住む部族では、文化の交流や融合が盛んに行われていたため、イスラム文化と融合して、モチーフはより抽象的に変化していった（図10）。



図9 文様が入った子供用帽子



図10 幾何学文様のミラーワーク

2-3-2. コレクションにおけるミラーワークの技法
 もともとは民族衣装を装飾する技法として発達して
 いったミラーワークだが、近年、海外のデザイナーに
 によるコレクション作品にも用いられるようになった。
 その制作方法は、民族衣装に用いられている基本的な
 技法によるものと、それとは異なる技法があり、大き
 く分けると、以下のような技法が挙げられる。

① 基本的な技法による作品

2015-2016年 A/W BURBERRY PRORSUM (図11)
 が発表したコレクションでは、丸型のミラーの周りを
 糸で布に留め付けていく基本的な技法が用いられてい
 る (図12)。



図11 2015-2016
 A/W BURBERRY
 PRORSUM



図12 図11部分拡大

② 穴を開けて留め付ける技法

2016年 S/S LOEWE (図13)、が発表したコレク
 ションでは、ミラーを不規則な形に切り出し、穴を開
 けて留め付ける技法が用いられている (図14)。



図13 2016 S/S LOEWE



図14 図13部分拡大

③ モチーフを繋げる技法

2012-2013年 A/W MIU MIU (図15) が発表したコ
 レクションでは、穴の開いた丸型のミラーを縫いつけ
 たモチーフを制作し、繋げる技法を用いている (図
 16)。



図15 2012-2013 A/W
 MIU MIU

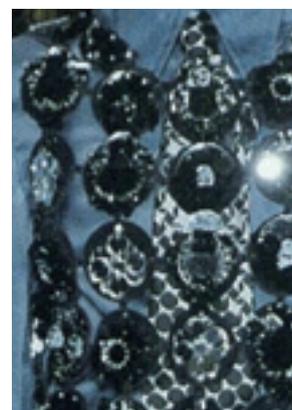


図16 図15部分拡大

④アクセサリのように作品に取り入れる技法

2015年 S/S MAISON MARGIELA (図17) が発表したコレクションでは、カットしたミラーを繋げ、アクセサリのように作品に取り入れる技法を用いている (図18)。



図17 2015 S/S
MAISON
MARGIELA



図18 図17部分拡大

コレクションで用いられるミラーワークは、民族衣装に見られる特定の地域や民族と関連した意味や役割を越え、純粋に装飾としてのミラーワークの可能性を感じさせる。しかし材料などが特注品であったりして一般的ではないものも多く、現代の服飾造形に活用していくには、様々な要素を工夫していく必要がある。

そこで、民族衣装に見られる基本的な技法と前述したコレクションに見られる技法を参考に、ミラーワークを、現代の服飾造形に役立つ、効率的でありながら効果的に装飾性を高める制作方法を試作した。

3. 試作

3-1. 試作材料

試作材料は、一般的な手芸用品店などで購入できるものを使用した。

①ミラー

インド北西部では、今も割られたガラスミラーの破片を削って形を整え、ミラーワークに用いているが、

現在、手芸用品店等で販売されているミラーワーク用のミラーは、ほぼアクリル製である。柔らかくて表面が傷つきやすいため、両面に保護膜がついている。

市販のミラーはすでに形や大きさが決まっており、形として丸型・三角形などがある。大きさも丸型のもは直径10mm、12mm、15mm、20mm など数種類ある (図19)。

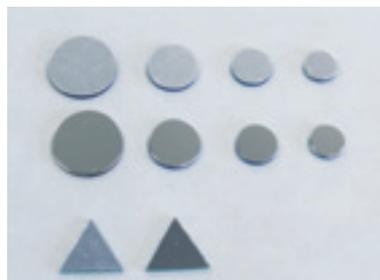


図19 市販されているミラー

また、穴の開いたものもあり、スパンコール感覚で扱うこともできる、不規則な形のミラーも販売されていて、様々なデザインに組み合わせられるようになっている (図20)。

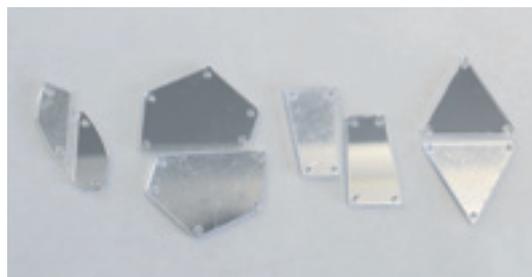


図20 穴の開いた、様々な形のミラー

しかし、10mm 以下もしくは20mm 以上の大きさの円形、その他の形、雫型などは市販では売られていない。市販されているサイズや形以外のミラーは、はさみやカッターで切ることができる塩化ビニールミラー板²⁾ (図21) も使用することで、オリジナルのサイズや形が可能になる。



図21 塩化ビニールミラー板

② 糸

ミラーは、糸を引き締めながら留め付けていくため、ある程度の糸の太さと強度が必要になる。今回は、糸を引いた際に切れてしまう細い糸、毛糸などの柔らかい糸は除外し、一般的な手芸用品店等で扱っている刺繍糸の中から、適度な強度があり、糸の太さや素材が異なる(1)25番刺繍糸、(2)5番刺繍糸、(3)サテン刺繍糸の3種類を用いた。

これらの素材を用いて、以下の試作を行った。

3-2. ミラーワークの試作

① ボタンホール・ステッチによる基本的なミラーワーク

基本的なボタンホール・ステッチによる刺し方の場合、糸が密になるように間隔を揃えながら糸の引き加減を調節することによってミラーの見え方が変わってくるため、美しくミラーを留め付けるには技術と経験が必要となる。また、用いる糸も重要と考え、刺繍糸の違いによるミラーの見え方を試作し、比較した。

25番刺繍糸：最も刺繍に使用される刺繍糸であり、6本の本綿の糸をより合わせている。土台の布の厚さ、ミラーの大きさ等に合わせて、使用する糸の本数を変えることが可能である(図22)。民族衣装に用いられるミラーワークの刺繍糸の太さに合わせるため、試作には2本どりで使用した。

5番刺繍糸：25番刺繍糸より太い本綿の糸で、1本どりで使用する。糸を引き締めやすいが、刺繍糸で留め付けたミラーの縁が太くなり、ミラーの表面が大きく覆われる(図23)。

サテン刺繍糸：美しい光沢のある刺繍糸で、6本のレーヨンの糸をより合わせている。試作では25番刺繍糸同様に、2本どりで使用した。

サテン刺繍糸は、糸の滑りは良いが、糸が絡まって毛羽立ちやすいため、扱いに注意が必要である。しかし、使用する糸の本数を自由に変えられるため、土台の布やミラーの大きさに合わせて調節できる。また、糸自体に光沢があり、ミラーと糸との調和が取りやすい(図24)。



図22 25番刺繍糸 図23 5番刺繍糸 図24 サテン刺繍糸

25番刺繍糸やサテン刺繍糸は、使用する糸の本数を自在に変えることで、ミラーの縁の太さを変えることが可能である。そのため、土台の布やミラーの大きさ等に制限が少ない。また、適度な強度があり、糸を引き締めやすく、比較的扱いやすい。

5番刺繍糸は、糸が太いため糸を引き締めやすいが、小さいミラーでは糸で留め付けた際、表面が大きく覆われてしまい、使用することが難しい。

特に25番刺繍糸(2本どり)は、3種類の糸の中で、一番民族衣装で用いられるミラーワークに近い仕上がりととなった。

これらの糸は、一般的な手芸用品店等で扱っており、入手が容易である。また色の種類も豊富なため、様々な作品に応用できることが分かった。

また、多民族に見られる丸型のミラーは、形が整えやすく、布に縫い付けるのが容易である(図25)。これに対して、三角、四角、菱形、涙型などの多角形のミラーは角が鋭角であるほど一箇所に糸が集中するため、均等に刺しにくい(図26)。また、糸がミラーの角で擦れて劣化するため、現存している衣服で、多角形のミラーが抜け落ちてしまったものが多い理由の一つと考える。

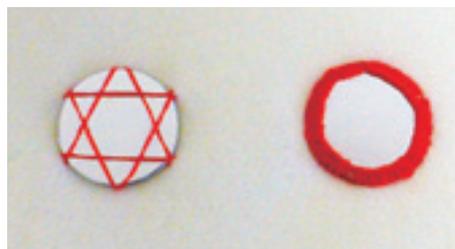


図25 丸型ミラーのボタンホール・ステッチ

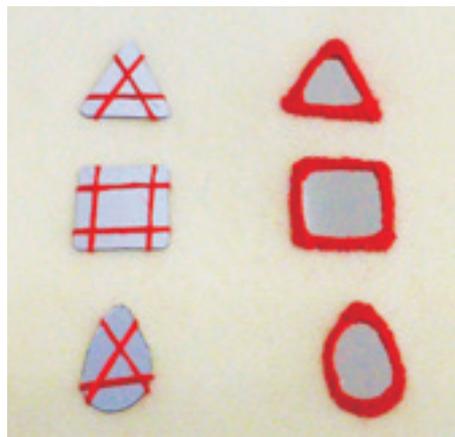


図26 多角形ミラーのボタンホール・ステッチ

ボタンホール・ステッチの場合、基本的には糸が密になるように間隔を揃えながら刺す事を効率的に行うには、技術と経験によるところが大きい。そのため、

制作者がなれるまでは、膨大な時間がかかる点が問題である。細かい手作業の効率を上げる工夫として、糸間隔を大きくすることで効率を上げることが可能になると考えた(図27)(図28)。しかし糸間隔を大きくするためには、ボタンホール・ステッチの間隔が大きくてもおかしくないように、刺繍糸の種類や色、図案などの工夫が必要である(図29)。また、民族衣装のようにボタンホール・ステッチのミラーワークで埋め尽くすのではなく、スワロフスキーのようにミラーに似た素材の装飾パーツを合わせて使用するデザインなども有効と考える。



図27 糸間隔を大きくしたミラーワーク1



図28 糸間隔を大きくしたミラーワーク2



図29 ミラーと同色のボタンホール・ステッチを用いたミラーワーク

② ミラー板を生地で挟み、ミシンで縫いつけたミラーワーク

前述したように、基本的なボタンホール・ステッチは細かい手作業であるため、慣れるまでは膨大な時間がかかってしまう。そのため、効率よくミシンで縫う方法として、チュールやオーガンジーなど透ける素材で挟み、その周りをミシンで縫い留めることにより、ミラーを効率的に留め付ける工夫をした。

この方法はミシンで縫うため、ミラーの形によっては、縫製技術が必要とされるが(図30)(図31)(図32)、刺繍糸でミラーを布に留め付けるのではなく、チュールやオーガンジーで挟み、その周りをミシンで縫うことにより、短時間により多くのミラーを留め付けることができる。

また、チュールとオーガンジーなど異なる素材を使用することにより、ミラーを挟んだ際の透け感が変わり、ミラーの光り方に違いが生じることで装飾性を高

めることが可能になる。

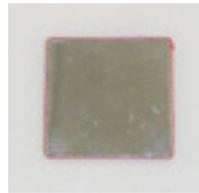


図30 正方形のミラー



図31 ダイヤ型のミラー

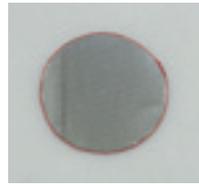


図32 丸型のミラー

③ カットしたミラー板に穴をあけ、ビーズでとめつけたミラーワーク

ミシンを使わずに、ミラーを手でより簡単に留め付けることができるように、ミラーに留め付けるための穴を開けた。これにより、スパンコールのように手軽に装飾することを考えた。

カットしたミラーは、留め付けるために、針が通る程度の、できるだけ小さい穴を開けていく。ミラーに穴を開ける工具として、プラモデル等を組み立てる際にプラスチックや薄い金属板に穴を開けるためのピンバイス(図33)に、直径1mmのドリル刃を装着し、使用した(図34)。



図33 ピンバイスと1mmドリル刃



図34 ピンバイスによる穴あけ

ミラーに穴を開けることにより、ミシンなどの機材を用いなくても、スパンコールのような感覚で、ミラーを効率的に留め付けることができた。この方法

は、刺繍糸でミラーを留め付ける方法よりもミラーの安定感や強度は落ちるが、ミラーの大きさや形、留め付ける穴の数や大きさ、位置を調整することにより、安定感を補強することができる（図35）。

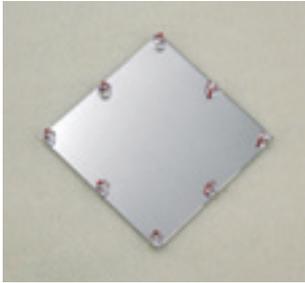


図35 ミラーの留め付け

④ 塩化ビニールミラー板を立体的な装飾に用いるミラーワーク

平らなミラーをそのまま布に留め付けるのではなく、立体に変形させて、効果的に装飾性を高めることを試みた。

試作では、樹脂製の塩化ビニールミラー板が、熱で変形する性質を活かし、平らなミラーに熱を加え、立体的に変形させること³⁾を試みた。

初めに、ミラーを折り紙のように折ってみたところ、紙のように完全に折ることは出来ず、曲がるだけに留まった。また、熱が冷めると形が固定されるため、短時間で一気に形を整える必要がある。

次にダイヤモンド型のミラーに熱を加え、手で押し曲げながら変形させたところ、花びらのように不規則な立体となった（図36）。同様に円形のミラーは造花用こてで円の中心を一気に窪ませることにより、花のような立体へ変形した（図37）。

以上のことから、熱した塩化ビニールミラー板は、手や造花用こてなどを当てることによって、立体的なモチーフに変形させることができることが分かった。



図36 手で変形させたミラー



図37 造花用こてで変形させたミラー

3-3. 試作のまとめ

以上の4つの試作をまとめると、以下のようになる。

ボタンホール・ステッチによる基本的なミラーワークでは、使用する土台の布やミラーの大きさ、作品のデザインに合わせて、糸を選ぶことが重要である。しかし、この技法の場合、糸が密になるように間隔を揃えながら刺す事は難しく、膨大な時間と技術、経験が必要とする。

細かい手作業の効率を上げる工夫として、糸間隔を大きくすることで効率を上げることは可能だが、糸間隔を大きくするためには、ボタンホール・ステッチの間隔が大きくてもおかしくないように、糸の色や図案を選択することが必要である。

ミラー板を生地で挟み、ミシンで縫いつけたミラーワークでは、ミラーの形によっては縫製技術が必要とされるが、正方形やダイヤ型など、直線で構成された形であれば、ミシンで効率的に留め付けることが可能であることが分かった。また、用いる生地によって、ミラーを挟んだ際の透け感が変わり、ミラーの光り方に違いが生じることで、装飾性を高めることができる。

カットしたミラー板に穴をあけ、ビーズでとめつけたミラーワークでは、ミラーの周囲に小さな穴を開けることで、刺繍糸でミラーを留め付ける方法よりもミラーの安定感や強度は落ちるが、スパンコールのように手軽に装飾できることが可能となる。

塩化ビニールミラー板に熱を加えて立体的な装飾に用いるミラーワークでは、ミラーを曲げるためには均等に熱を加え、熱が冷める前に形を作るため、折り紙のように、複数回折らなくてはいけない立体物への変形は難しい。手で押し曲げる、または造花用のコテを使用するなど立体的なモチーフに変形させることで装飾性を高めることができる。

4. 作品への展開

上記の試作を基に、それぞれのミラーワークを服飾造形作品へと展開した。

4-1. ボタンホール・ステッチによる基本的なミラーワークを用いた作品〔作品1〕

4-1-1. コンセプト

ミラーワークの装飾性を高め、光を受けて輝くことでより一層女性の美しさを表現するようローウエストをマークしたドレスにまとめた。

4-1-2. 材料

生地

- ・ビュスティエドレス：シルクサテン（シルク）
- ・ウエストベルト：シルクサテン（シルク）
- ・オーバースカート：ラメチュール15d（ナイロン）

装飾

- ・ミラー（手芸用 穴なし）（直径15mm、20mm）
- ・DMC サテン刺繍糸（レーヨン）
- ・スワロフスキー（#5328 3mm クリスタル）
- ・ブレード（幅1cm）
- ・ビジュ（しずく型 クリスタル）

4-1-3. 制作方法

基本的なボタンホール・ステッチの技法を主としながら、民族衣装のように、ボタンホール・ステッチのミラーワークを刺繍で埋め尽くすのではなく、ブレードやスワロフスキーなどを使い、現代的な図案を考えた。軽やかさを出すために、ボタンホール・ステッチは、あまり糸が密にならないように刺繍の間隔を調節した。

4-1-4. 考察

刺繍の間隔を調節し、少ない刺繍で透け感を出しながら、使用したブレードやスワロフスキーが引き立つことにより、効率的でありながら効果的に装飾性を高めることができた。

ビュスティエドレスやウエストベルトに使用したシルクサテンの生地とミラーワークに使用したサテン刺繍糸が光沢感を持ちながらミラーと美しく調和することができた。

シルクサテンの白い色に合わせて、クリスタルのスワロフスキーやビジュ、銀色のブレードなどに使用する色を限定し、素材の材質や色を調和させることにより、上品なフォーマルドレスに仕上がった（図38）（図39）。



図38 ウエストベルト



図39 作品1 フォーマルドレス（2010年）

4-2. カットした塩化ビニールミラー板を、チュール、オーガンジーで挟み、上からミシンで縫いつけた作品〔作品2〕

4-2-1. コンセプト

大小のダイヤ形に切った塩ビミラー板をランダムに配置し、チュールを重ねたオーバースカートに縫い付けることで、夜空に輝く無数の星を表現した。

4-2-2. 材料

生地

- ・ビュスティエドレス：シルクジャカード（シルク）
- ・オーバースカート：ラメチュール15d（ナイロン）
- ・チュール15d（ナイロン）
- ・オーガンジー（ポリエステル）
- ・ウエストベルト：2.5cm 幅 グログランリボン

装飾

- ・塩化ビニールミラー板（厚み0.5mm）
- ・サテンリボン（幅5cm）

4-2-3. 制作方法

効率よくミラーワークを行うために、ミラーはミシンで縫いやすくするため、直線的なダイヤ型にした。

ミラーを挟む生地により、光り方に違いが生じるため、チュールとオーガンジーの2種類の素材を使用した(図40)(図41)。



図40 チュールで挟んだミラー



図41 オーガンジーで挟んだミラー

4-2-4. 考察

ミシンで縫いやすいようにミラーをダイヤ型にしたことにより、留め付けの作業時間を大幅に短縮することができた。また、2種類の素材を使用することにより、ミラーを挟んだ際に、ミラーの光り方に違いが生じ、チュールを重ねたオーバースカートの装飾性が高まった(図42)(図43)。

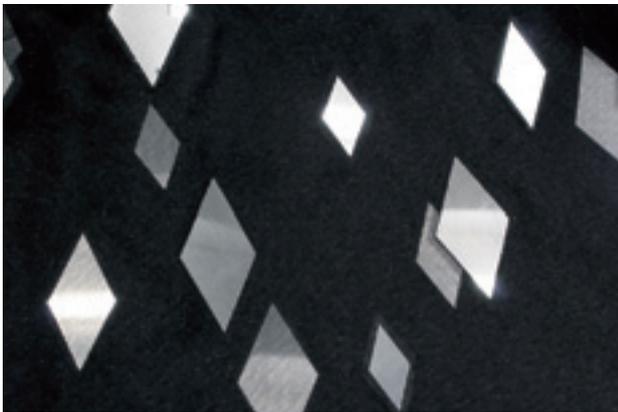


図42 オーバースカート 装飾部分拡大



図43 作品2 フォーマルドレス (2011年)

4-3. カットした塩化ビニールミラー板に穴をあけ、ビーズでとめつけた作品〔作品3〕

4-3-1. コンセプト

正方形に切った大小の塩化ビニールミラー板を規則的に配置し、スワロフスキーで直線的なシルエットのワンピースに留め付け、ネオンが輝く都会のビル群を表現した。

4-3-2. 材料

生地

- ・ワンピースドレス：タフタ (ポリエステル)
- ・チュール15d (ナイロン)

装飾

- ・塩化ビニールミラー板 (厚み0.5mm)
- ・スワロフスキー (#5328 3mm、4mm クリスタル)
- ・サテンリボン (幅5cm)

4-3-3. 制作方法

カットしたミラーにできるだけ小さい穴を開け、上から裾に向かってミラーが大きくなるようバランスを考え、規則的に配置した。ミラーは4mmのスワロフスキーと一緒にワンピースドレスに止めて装飾性を高めた (図44)。



図44 4mm スワロフスキーによるミラーの留め付け

4-3-4. 考察

ミラーに穴を開けることにより、スパンコールのような感覚で、ミラーを効率的に留め付けることができた。このことにより、都会的な感覚を備えた作品に仕上がった (図45)。



図45 作品3 フォーマルドレス (2012年)

4-4. 塩化ビニールミラー板を立体的な装飾に用いた作品〔作品4〕

4-4-1. コンセプト

ミラーワークを施したのものや、ミラーをチュールで挟んだフェルトや圧縮ウールの花の他、熱を加えて立体的に変形させたものを、ショート丈のジャケットに、衿の形のように留め付けた。花のパーツを重ねることにより、八重桜のように華やかな春の花々を表現した。

4-4-2. 材料

生地

- ・ジャケット、ワンピースドレス：ウールジャカード (ウール、ポリエステル混)
- ・オーバースカート：ラメチュール15d (ナイロン) ネット (ナイロン)

装飾

- ・塩化ビニールミラー板 (厚み0.5mm)
- ・ミラー (手芸用 穴なし) (直径10mm、20mm)
- ・圧縮ウール (ウール)
- ・フェルト (アクリル)
- ・ラメチュール15d (ナイロン)
- ・チュール15d (ナイロン)
- ・DMC 刺繍糸25番
- ・パール (直径3mm ホワイト)
- ・丸小ビーズ

4-4-3. 制作方法

装飾の花は大、小2種類の大きさで作成した。熱を加えると手で簡単に形を変えられる塩化ビニールミラー板の性質を活かし、低温アイロンで温め、熱が冷めないうちに造花用こてを当て、立体的に造形した。さらに花びらの先は指で外側にめくり、花の表情をつけた (図46)。



図46 熱を加える前と、熱を加えて変形させたミラーの花

花の形に変形させた後、花の中心に穴を3か所開け、圧縮ウールやフェルト、チュールを重ね、土台のジャケットにパールでバランス良く留め付けた (図47)。



図47 装飾部分 拡大

圧縮ウールやフェルトの花の上にミラー (手芸用穴なし) を乗せ、バリエーションの花を作った (図48) (図49)。



図48 ミラーワークを施した花の装飾



図49 ミラーをチュールで挟んだ花の装飾

出来上がった花の装飾は、バランスを見ながら配置し、ミラーの周りをジャケットに留め付けた (図50)。



図50 花の装飾

4-4-4. 考察

塩化ビニールミラー板の特性を利用し、加熱したミラーを立体的な花の形に変形させることにより、装飾性を高めることができた。

さらに、ミラーと圧縮ウールやフェルトを重ねることにより、使用する花のバリエーションが増え、華やかな作品に仕上がった (図51)。



図51 作品4 フォーマルドレス (2015年)

5. まとめ

今回、4つの作品を制作することにより、新たなミラーワークの制作方法として、以下の技法が効率性と効果的な装飾性の観点から、有効であることが分かった。

基本的なボタンホール・ステッチの技法を用いた場合、糸が密になるように間隔を揃えながら刺す事は、技術と経験によるところが大きく、膨大な時間がかかる点が問題として挙げられた。しかし、糸間隔を大きくすることで刺繍作業を軽減化し、効率をあげることが可能となった。その際、ドレスやウエストベルトの生地とミラーワークが調和するように、刺繍糸の種類や色、図案などを工夫した。また、スワロフスキーやブレードなど、ミラーの輝きに似た素材の装飾パーツを合わせて使用することで、上品な装飾効果をもたらすことができた。

ミラー板を生地で挟み、ミシンで縫い付ける技法では、ミラーがダイヤ型などの直線で構成された形であれば、手作業で留め付けるよりも、制作作業が大幅に効率化できることが分かった。その際、チュールとオーガンジーの2種類の素材を使用することにより、ミラーの光り方を変化させ、装飾性を高めることが可能となった。

ミラーに穴を開け、スパンコールのような感覚で留め付ける技法では、手作業でより簡単にミラーを留め付けることができ、制作作業を効率化することが可能となった。

塩化ビニールミラー板に熱を加えて、立体的な装飾に用いる技法では、手や造花用のこてを使い、花の形に変形させることにより、装飾性を高めることができた。さらに、ミラーと圧縮ウールやフェルトを重ねることにより、装飾性が高まった。

6. おわりに

人々の生活のなかで、主として女性の手により作られてきた衣服や調度品などに施されたミラーワーク（ミラー刺繍）には、民族や部族の伝統と文化と祈りが縫い込まれており、母から娘、さらに娘からまたその娘へと、技術が受け継がれてきている。現代では、その刺繍技法は、産み出した民族や地域を越えて、グローバルに活躍するデザイナーや他の地域に暮らす一般の人々にも使われ、更なる発展を遂げている。こうしたミラーワーク（ミラー刺繍）を用いて作品を制作する際には、伝承されてきた刺繍技法をそのまま用いるだけでは、技法と現代の服飾造形が融合されにく

い。常に試行錯誤を繰り返しながら、効率的でありながら効果的に装飾性を高めていくことが必要であり、その過程でたとえ失敗しても、それがまた別の作品で活かせることもあると考える。

今後はミラーワーク以外の手芸技法を対象にした研究、作品制作を行い、現代の服飾造形の可能性を広げていきたい。

註

- 1) 邪視とは、眼差しや視線に宿る力から災いをもたらすという信仰である。そのような眼差しの力には嫉妬や妬みがあると言われる。
三尾稔・金谷美和・中谷純江編『インド刺繍布のきらめき—バシン・コレクションに見る手仕事の世界—』株式会社昭和堂2008. p. 43.
- 2) 塩化ビニールミラー板とは、ポリ塩化ビニル（PVC）から作られる樹脂性ミラーのことで、カッターやはさみ、のこぎり等で裁断でき、加工しやすいのが特徴である。厚みは0.5mm、1mm、2mmがあるが、カッターやはさみで切ることができるのは0.5mmの厚みまでとなっている。
- 3) 塩化ビニールミラー板に熱を加える際は、ミラーに当て布を被せ、120度の低温に設定したアイロンで均一に熱を加えた。

図版出典

- 図1 三尾稔・金谷美和・中谷純江編
『インド刺繍布のきらめき—バシン・コレクションに見る手仕事の世界—』株式会社昭和堂
2008. p. 43.
- 図2 上羽陽子『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼—ラクダとともに生きる人びと』
株式会社昭和堂 2006. p. 164. 口絵58
- 図3 図2に同じ p. 164. 口絵63
- 図9 アートダイジェスト編集部『アジアの布と暮らす』株式会社アートダイジェスト 1998. p. 40.
- 図10 John Gillow and Nicholas Barnard. *Indian Textiles*. Thames & Hudson 2008. p. 60.
- 図11 「MODEetMODE No. 371 (夏号) 2015-2016 秋冬パリ・ミラノ・ロンドン・ニューヨークプレタポルテコレクション号」(株)モードエモード社 2015. p. 103.
- 図12 図11に同じ
- 図13 「FASHION NEWS vol. 200 12月号」株式会社INFASパブリケーションズ 2016. p. 23.

- 図14 図13に同じ
- 図15 「gap PRESS vol.106 PARIS PRÊT-À-PORTER COLLECTION 2012-2013 Autumn & Winter」(株)ギャップ・ジャパン2012. p. 30.
- 図16 図15に同じ
- 図17 「MODEetMODE No. 370 (春号) 2015春夏パリオートクチュールコレクション号」(株)モードエモード社 2015. p. 125.
- 図18 図17に同じ
- 図39 『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部 教員作品集 平成22年度第7回』2011. p. 6.
- 図43 『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部 教員作品集 平成23年度第8回』2012. p. 6.
- 図45 『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部 教員作品集 平成24年度第9回』2013. p. 6.
- 図51 『杉野服飾大学・杉野服飾大学短期大学部 教員作品集 平成27年度第12回』2016. p. 6.
(上記以外の図は筆者撮影)
- のミラーワーク」大阪人間科学大学紀要 第6号 2007.
- ・中山富美子『オリエンタルな刺繍』日本放送出版協会 1999.
 - ・文化服装学院編『文化ファッション大系 服飾関連 専門講座⑧ 手芸』文化出版局 2004.
 - ・NHK きんきメディアプラン株式会社情報工房「シルクロードの装い〜パリ・コレに花開いた遊牧の民の美〜」NHK きんきメディアプラン 2004.
 - ・文化学園服飾博物館「文化学園服飾博物館所蔵品 世界の刺繍」文化学園服飾博物館 2007.

参考文献

- ・NHK 取材班1990日本放送協会『NHK 世界手芸紀行 ④ミラー刺しゅう、ジャワ更紗編』日本放送出版協会 1990.
- ・シェイラ・ペイン (翻訳:近藤修)『embroidery from india & pakistan インドとパキスタンの刺繍』デザインエクステンジ株式会社 2003.
- ・上羽陽子『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼—ラクダとともに生きる人びと』株式会社昭和堂 2006.
- ・岩立広子『岩立広子コレクション インド大地の布 Textiles:The Soul of India』株式会社求龍堂 2007.
- ・三尾稔・金谷美和・中谷純江編『インド刺繍布のきらめき—バシン・コレクションに見る手仕事の世界—』株式会社昭和堂 2008.
- ・柳宗玄『祈りとともにある形 インドの刺繍・染と民画』株式会社みすず書房 2009.
- ・誠文堂新光社『アジアのかわいい刺繍』株式会社誠文堂新光社 2012.
- ・監修 上羽陽子『世界のかわいい民族衣装』株式会社誠文堂新光社 2013.
- ・芳賀日向『アジア・中近東・アフリカの民族衣装 衣装ビジュアル資料2』株式会社グラフィック社 2013.
- ・橋本康子著「インド北西部の民族服—衣服形態を中心に—」大阪人間科学大学紀要 第2号 2003.
- ・橋本康子著「インド グジャラート州 カッチ地方